

令和7年度 第3回千葉県博物館協議会 議事要旨

日時：令和8年2月3日（火） 午前10時00分～12時20分

会場：千葉県立美術館 研修室

出席者： 委員 高橋委員（議長）、齋藤委員、布施委員、卯木委員、湯浅委員、関沢委員、鴻野委員、
門脇委員

博物館 美術館：貝塚館長、高山副館長、立和名普及課長、松田研究員

中央博物館：四柳館長

現代産業科学館：松田館長、竹内普及課長、小笠原学芸課長

関宿城博物館：糸原館長

房総のむら：西原館長、鎌形副館長兼事業課長

文化振興課 山口副参事兼室長、小野主幹、宮川副主査、鈴木技師

事務局 猪野企画調整課長、監物上席研究員（中央博物館）

※ 配付資料確認【事務局】

- 1) 議事次第
- 2) 協議会委員名簿、出席者名簿、座席表
- 3) 議事資料

- 1 開会【事務局】：委員10名のうち8名の出席により会議成立
- 2 あいさつ【美術館：貝塚館長】
- 3 出席委員紹介
- 3 出席職員紹介
- 4 議事（別紙参照）【議長：高橋委員】
- 5 諸連絡【事務局】
- 6 閉会【事務局】

【議 事】

(1) 令和7年度企画展及び美術館建築（国登録有形文化財）の視察と講評（県立美術館）

県立美術館の企画展「鉄絵銅彩 神谷紀雄陶展 春風陶花」及び美術館建築（国登録有形文化財）を委員が視察し、意見交換を行った。

○高橋議長：千葉県立美術館はゆったりとみることができて気に入っている。展示室が広いと苦勞があると思うが、その点はいかがか？

→美術館：苦勞を見せないのが我々の技で、それがゆったりとした心地良さに繋がるものと思う。

○鴻野委員：企画展も大変興味深かったが、同時開催のコレクション関連展示「県展史の人々―千葉県立美術館のはじまり物語」は、美術と千葉県の関わりが示されていて、それぞれの時代で美術が生活や地域にどうかかわってきたか、千葉がどういう役割を果たしてきたことがよくわかった。

また、触れる作品の展示は、千葉県立美術館が多様性を重視し、様々な人に見ていただくためにいろいろな取り組みをしている中で、目の見えない方も楽しめる、目の見える方も触れることを通して新たな魅力を発見することができる取り組みであった。

(2) 令和6年度 千葉県立美術館・博物館自己評価結果について

資料1-1に沿って文化振興課から、資料1-2、資料1-3及び参考資料に沿って各館から、「令和6年度 千葉県立美術館・博物館自己評価結果」についての説明を行った。

○高橋議長：入館者数について、コロナの影響で減ったのが元に戻らないという話があった。社会的状況も影響はするが、展示内容にも左右されるので、長い期間で見る必要がある。全体で見ると少しずつ増えているようであるが、どのような取り組みをされたのか、有効な取り組みがあれば教えてほしい。

→美術館：人数については、「入館者数」と「入場者数」のふたつがある。「入館者数」は建物の中に入った人数であり、「入場者数」は館が主催する展示を見た人数である。美術館では、敷地内の屋外イベントにも力を入れているが、これは物理的に来場者数をカウントすることが難しい。12万人の入館者だけでなくプラスアルファが美術館を楽しんでいる。地域の飲食店・雑貨店と連携して、夜店をやるイベントを年に複数回実施しているが、来場者は多い。地域全体を盛り上げていこうという連携に取り組んでいる。

→文化振興課：美術館はポートパークの一角にある。この公園の回遊性、人の流れを変えたいということで、公園側に行った人にも、美術館があるということがわかるように、サインの増設を行う等、ハード面での整備も行っている。

○湯浅委員：取り組みが進んでいるところ、足りないところを率直に御報告いただき、よくわかっ

た。

中央博物館について、学校関係の連携が進んでいるのはすばらしい。一方で、大利根分館と大多喜城分館は現在休館中である。休館していることは承知しているが、ここが発展どころである。中央博物館を中心としてサテライトを展開するやり方は伝統があるが、今後どう中央博物館と分館が連携した千葉県の博物館構想を進めていくのか？休館している分館は開館する予定はあるか？

→中央博物館：大利根分館は建物の老朽化のため、そのままの状態では再開館できる状況にない。

一方、同じ香取市内に佐原伝統的建造物群保存地区があり、それらの建物を活用した地域博物館のような地元の活動がある。博物館としては、ノウハウを提供するなどして、その活動と連携を図っていく方向で考えている。

大多喜城分館については大多喜町に建物を移譲することが決まっており、来年から耐震補強工事等に入る予定である。大多喜町は移譲後も博物館として使っていきたいという意向は持っている。大多喜城は、地元のランドマークになっていて、休館中であっても観光客も多い。分館（天守閣）脇には研修館という建物があり、展示も継続しているので、町とも協力しながら運営していく方法を模索している。

○齋藤委員：それぞれの館の立地条件や環境によって工夫、苦労していることがわかった。房総のむらは、夏の暑さや熱中症警戒アラートに影響される難しさがあるとのことだが、最近ボランティアが増えていると伺った。先週、ちょうど3年生の児童を連れて房総のむらに行ったが、子供たちが昔あそびに参加した際に、それぞれのコーナーでボランティアが手厚く教えてくれたので、とても楽しみ、満足して帰ってくる事ができた。地域のボランティアの力を生かすことで、できることもあると思った。

中央博物館では、学校利用の受入れや、学校への周知が進んだとのこと。また、博学連携での出前授業件数も増えているが、何か特別なことをしたのか？

→中央博物館：以前から継続してやってきたことではあるが、年間の展示・体験メニューのチラシを作成し、教育委員会、教育事務所を通して各学校に行き渡るようにした。現在、教育普及の部署にいる教員枠の職員が熱心であり、伝手をたどって、周りの職員も巻き込んで積極的に取り組んでいることが功を奏していると考えている。

○鴻野委員：入館者数が注目される場所ではあるが、企画展によって年度ごとに異なるものであり、長期的視点で見えていく必要がある。例えば、住民数の少ない地域での移動展や、来館者が多いわけではないが価値ある展覧会は、公立の博物館でしかできないことであり、大きな意義がある。美術館の「浅井忠、あちこちに行くーむすばれる人、つながる時代ー」も興味深い展示であったし、中央博物館の「万祝博覧会」も、日本の歴史を新しい視点から照射するものであったと思う。関宿城博物館も地域の歴史を明らかにする重要な取り組みを行っている。

中央博物館の学校連携について聞いたかったが、先ほどの議論の中で伺ったので、そのノウハウを共有していきたい。

○門脇委員：デジタルミュージアムの整備や視聴数が評価の対象となっている。一般的に、ホームページなどのデジタル上で受け皿となるコンテンツについて、ホームページをきれいに作ったからと言って閲覧者数が増えるわけではない。どうやってそこに来るかという、動線を作らなければならない。SNSもその手段のひとつであり、うまく使って閲覧者数を伸ばすようにした方がよい。

ホームページを見て、デジタルミュージアムはどこにあるかが分かりづらいと思った。ここを見てほしい、使ってほしいというのであれば、そこに誘導する道筋をつくらないと活用は増えない。

○関沢委員：自己評価の目標を再確認してはいかがか。入館者数が前年度と比べて減っているから、というのは評価の目標として合っているのか。企画展はどこも一生懸命、準備して実施しているかと思うが、テーマによって入館者数に繋がりやすいものとそうでないものがあるという説明もあった。鴻野委員が中長期的視点と言っていたが、過去5年の平均値等を基準にして、それよりも増えているのか下がり続けているのか、スパンを広げて考えた方が有効な評価になると思う。

→美術館：今回の評価では、令和5年度と令和6年度の比較となっているが、ゆくゆくは入館者数は3年平均をとって比べていくのが良いのではないかという話を内部でしている。5年平均値でもいいが、コロナの影響が大きかった時期を含めない3年くらいの期間を基準として比較していきたい。

→文化振興課：今年度から外部評価に取り組むので、それについては平均値の目標を定める方向で考えている。

○布施委員：美術館の富里市と多古町での移動展示の取り組みについて、人口規模が違うので人数で見ると減少しているが、人口比で見ると同等であったという報告があった。人口規模が違うという視点は重要で、入館者数だけで捉えてしまうと、人口減少もある中でこの機関も厳しい。その中でも魂を込めて、地域に根差した取り組みを頑張っていることについては評価されるべきと考えるので、表面的な数だけではなく、実質的な取り組みをわかってもらえるよう自信をもって書いていただきたい。

美術館での千葉市内の飲食店とのコラボレーションの報告があった。また、前回の協議会では関宿城博物館でも同様の取り組みがあると伺い、すばらしいと思った。県内外の方に来てもらう、観光というミッションに対する取り組みであると思う。県外の方が興味を持つのは、自分の住んでいない、知らない土地を知りたいからであると思うが、その地に住んでいる人が繰り返し訪れる施設だと興味を持ってもらえるのではないかと。地元と連携を深めていただくとより良くなる。入館者数を取る際も、県外の方にどれくらい来ていただいているのか、県内と県外の数値を見ていくことが大事だと思う。

(3) 令和8年度実施事業について

資料2に沿って各館から、「令和8年度実施事業について」説明を行った。

○門脇委員：中央博物館の企画展で小説『薬屋のひとりごと』とコラボレーションをすることだが、みなさんが想像するよりも人気があるコンテンツなので、グッズ製作や会場内で謎解きの仕掛けがある等、ファンに響くようなことができると良いと思う。

インバウンドについては、房総のむらの「おまつり」は効果的だろう。しかし、海外の方が「おまつり」に合わせて来るわけではないので、常にリトルジャパンを体験できる施設であると良い。ホテルにもチラシ、ポスターは出しているとのことだが、インバウンドを狙ったチラシは日英併記ではなく、英語のみの資料を作成した方が良い。

SNSについて、インスタグラムは広告を貼った方が良い。広告の中にもセグメントがあり、エリアや趣味嗜好を設定できるので、これを効果的に使うことが重要。戦国ファンは日本中、世界にもいるので、そういう層に響くようにすると効果は大きいと思う。

○布施委員：『薬屋のひとりごと』はアニメでの展開もあるが、アニメの人気はすごい。アニメが大好きなコアなファンを募って特別ボランティアスタッフとして活躍してもらおうというのも一案。関宿城博物館では、戦国好きの中学生などにボランティアとして力を発揮してもらおうことも考えられる。ただし、仕事が増えることにもなるので、ひとつのアイデアとしてご参考にしていただければと思う。

以上、議事終了